

製された。

講演終了後、別室で誓願寺管長様を加えて懇親会を開いた。報告を終えるにあたり痛感することは、碑石を新たにしたことによって、東洋の人格、思想、業績などについて現時点において再び考えなおすよい機会となったということである。

最後に各方面にわたり御指導、御協力を賜った各位に対し深く感謝申上げる。

(杉立 義一)

第四回国際アジア伝統医学大会 (The 4th International

Congress on Traditional Asian Medicine)

標記の学術大会が一九九四年八月十九日から二十一日までの三日間、東京の国立教育会館を会場に開催された。グレコ・アラブ系のユナニ、インド系のアユルヴェーダ、および中国系などアジア諸伝統医学の学際的研究発表と交流の大会で、第一回はオーストラリアのキャンベラで開催された。

主催はヨーロッパに本部がある IASTAM (International Association for the Study of Traditional Asian Medicine) 国際アジア伝統医学協会) で、今回は日本東洋医学会も主催に加わった。共催が日中医学協会、協催が東亜医学協会・ミズノ、後援が文部省・厚生省・外務省・通産省・日本医師会・日本医史学会など計十九の機関・団体等で、事務局は順天堂大の医史学研究室内におかれた。

今大会は役員が名誉会頭・矢数道明、会頭・大塚恭男、事務局長・酒井シヅ、副事務局長・津谷喜一郎、プログラム委員長・Paul U. Unschuld・丁宗鐵、組織委員・青木保・杉田暉道・中田直道・松田邦夫・室賀昭三・山田慶兒の諸氏で運営された。主な日程は次のようである。

十八日はサテライトシンポジウムが「日本における宗教と医学」のテーマで、熱海MOA美術館の能楽堂で持たれた。座長は青木保氏。

十九日はバシヤム賞の授賞式と記念講演があり、今回は Roger Jeffery・Patricia Jeffery と栗山茂久の各氏が受賞した。またワークショップは 1 「近代以前の伝統医学の文献的研究」が P. Unschuld 座長、2 「漢方薬の科学的研究」が鳥居塚和生座長、3 「アジア伝統医学システムの存続と復興」が真柳誠・A. Godle 座長、4 「自然と医学」が永田勝太郎座長、5 「社会科学とアジア伝統医学」が湯浅泰雄・園田恭一座長、6 「アジア伝統医学とマネー」が津谷喜一郎・R. Jeffery 座長で、各国から発表がなされた。一般講演はオーラルとポスターの双方があり、当日夜は会場となりの霞ヶ関ビル内の東海大学同窓会館で懇親会が持たれた。

二十日は IASTAM 名誉会長 C. Leslie 氏の特別講演「盲人の人類学者とアジア伝統医学の象」、大場恭男氏の会頭講演「古代アジア医学の伝統」があった。ワークショップは 7 「針灸と近代文明」が八瀬善郎・R. Chow 座長、8 「精神医学とアジア伝統医学」が中田直道・池上正治座長、9 「生命呼吸

金光明最勝王経にみる医学

杉田 暉道

「現代に生きる伝統科学」が栗山茂久座長、10「伝統医学いかにあるべきかー針灸医学の立場から」が藤本蓮風・木下伸一座長で行なわれた。さらにオーラル・ポスターの一般講演のほか、NHKのBSフォーラム公開シンポジウム「人にやさしい医療を求めて」が小出五郎NHK解説委員の司会で開かれた。

二十一日は特別講演が山田慶兒氏「長命法と錬金術」、西野皓三氏「氣と呼吸法について（一般公開）」があった。ワークショップは11「医療人類学とアジア伝統医学ー養生文化と環境医学」が竹村真一座長、12「伝統医学の脈診を科学するー東西の医学の見地から」がN.C.・上馬場和夫座長、13「ターミナルケアとアジア伝統医学」が上野圭一座長、14「ライフスタイルとアジア伝統医学」が幡井勉・K. Krishna 座長で各々活発に討論された。またポスター・オーラルの各セッションでは一般講演があった。

これまで当大会はどちらかという、南アジア・西アジアのアルヴェード・ユナニが主体であった。そこで近年、注目されている東アジアの中国系からも研究発表を求める目的で、今大会は日本で開催された。中国の大陸と台湾から政府衛生機関の要人も出席、全体で世界二十の国と地域から参加・発表があり、出席者は約千名に達した。各伝統医学が一堂に会した点で、比較医学史の面においても意義深い学術大会であった。

(真 柳 誠)

本経は古代インドにおいて三世紀頃に成立したと考えられ、日本では奈良時代に広く読誦された。それは『金光明最勝王経』巻第六、四天王護国品第一二に「汝等若しよくこの経を護持せば経力によるが故に、よくもろもろの苦、怨、賊、饑饉およびもろもろの疾疫を除かん。是故に汝等四衆、この経王を受持し読誦するものを見ては、またまさに勸心に共に守護を加えて、為に衰脳を除き、安樂を施与すべし」と広大な功德が述べられているからである。

医療面については除病品第二四に「医人は四時（春時、夏、秋時、冬時）を解し、またその六節（華時、熱際、雨際、秋際、寒時、氷雪）を知り、身七界（身体の七種類の組織要素）を明閑（あきらかにする）にして薬を食するにたがうなからしむ。いわく味界、血、肉、骨および髓、脳なり。《入門アーユルヴェード》の四七頁の内容と一致病の中に入る時は、その療すべきや否やを知る。病に四種の別あり、いわく風（ヴァータの障害）、熱（ピッタの障害）、痰瘰（カパの障害）および総集（ヴァータ、ピッタ、カパの三つの病素の障害）の病《入門アーユルヴェ